

Title	貧富調節論
Author(s)	本庄, 榮治郎
Citation	経済論叢 (1926), 23(1): 154-158
Issue Date	1926-07-01
URL	http://dx.doi.org/10.14989/128418
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號一第

卷三十二第

行發日一月七年五十正大

論叢

効用、價值及び價格

九州帝國大學
教授 文學博士

高田 保馬

資本利子税と地方附加税

教授 法學博士

神戸 正雄

ツエツコ・共和国の土地制度改革

教授 法學博士

河田 嗣郎

一九二二年のロシア勞働法

教授 法學士

末川 博

我國財政の季節的變動

助教授 法學士

汐見 三郎

講演

我國の國際貸借と金解禁問題

法學士

井上 準之助

說苑

誤れる植民政策の畸形兒・琉球

教授 法學博士

山本 美越乃

足袋の製造工程

法學士

本多 芳郎

雜錄

貧富調節論

教授 經濟學博士

本庄 榮治郎

天台宗團の財政

經濟學士

中川 與之助

經濟學會大會記事

法令

清涼飲料税法・織物消費税法中改正・地方税に關する法律・健康保險特別會計法・農桑倉庫法中改正・輸出生絲検査法・郵便年金法・製鐵業獎勵法

雜 錄

貧富調節論

本庄榮治郎

一

貧富の問題は我國の上古から既に存在して居る。土地を所有せる階級と然らざる階級との關係は即ちそれである。^中近世徳川時代に至つて貨幣經濟の發達、町人階級の勃興は貧富の懸隔を更に一層甚しからしめた。階級制度の維持に努め之れが破壊の原因となるべきものを剪除することは徳川幕府の方針であつたが、社會の實生活に於ては、農民武士の疲弊、商工民の致富てふ現象が著はれ、農民の轉じて商工民となり、武士が財産を目的として町人から養子を迎へることも行はるゝに至つた。この貧富問題を解決するために幕府も富豪抑壓、御用金の強徴、其他の政策を採つたものであるが、其等の事實は

第二十三卷 (第一號 一五四) 一五四

別問題として、茲には當時の學者が富豪を抑壓して貧富の調節をなすべきことを説ける二三の例を示さうと思ふ。

二

本居宣長はその著「玉くしげ別本」^(天明七年西曆一七八七年)に於て論じて曰く『さて又世間の困窮に付ては、富る者は彌益富をかさねて、大かた世上の金銀財寶はうごきゆるぎに富商の手に集まる事也。^(略中)何に付ても貧人と富人との境は甚しき違ひにて、貧人は富人の爲に貧を増し、富人は貧人によりて富を重ねる也。^(略中)然れども世上の金銀財寶は兎角平等にはゆき渡りがたきものにて、片ゆきのするは古今の常にて、程よく融通する様に成り難き事也。其内にも今の世は別して貧敷者はますゝ貧しく、富る者はますゝ富ことの甚しければ、上に立て治め給ふ人の御計ひを以て、いかにもして甚富る者の手にあつまる處の金銀を能きほどに散して専ら貧民をすくひ給ふ様にあらまほしき物也。但しそのちらしやうは、其者の歸服して心から出すやう

にあらでは面白からず、いか程多く蓄へ持たればとても、これ皆上より賜りたるにもあらず、人の物を盗めるにもあらず、法度に背きたる事をして得たるにもあらず、皆是面々の先祖、又は己が働きて得たる金銀なれば、壹錢といへ共、しひてこれを取べき道理はなし。(略中)とにかくに強てこれを召む事は心よからず、又其金銀を他のことに用ひんも心よからず、只顧貧民を救はまほしきことなり。(略中)近來民をすくふ政は少くして唯只管上の御用の金銀をのみ言付らるゝ故に、富人はこれを恐れて、志有も救をば得せず。(略中)富人の金銀を散じて、貧民を賑はすべき仕方は有べき事也。儲右にも申せる如く、富人とても其金銀は面々の働にて得たる處なれば、しひて是を召れんは心よからぬ事也』云々

三

享和二年(西曆一八一八年)八月植崎九八郎が幕府の手を経て將軍に上り時弊を痛論したる上書を見るに、曰く『若いかやうにも御操合被遊がたき儀

に御座候はゞ、江戸京大阪は不及申、其外所々富有の商人町人共へ御用金被仰付、百姓方御寛め高并諸入用の數に御當て被遊可然奉存候、町人商人富有の者共は随分當時にても相應利潤を得候事に御座候、一體多年來農の本は衰へ、商の末かきみ來り、世の中詰りに相成候は、末の有餘を以本の不足へ御補ひ被遊候て、其上農をば商人より先立候氣味に惣體御舍被遊候得ば、自然と農は民の本業を辨へ、都人を羨み本土を立去り候ものもなくなり、商人も只今迄どうらはらに農を羨み候様に罷成、本末ゆりこし幾程なく目立候様に相成可申候』とて御用金にて國用を補ひ、他面それによつて在來の階級制度を維持し得べきことを説いて居る。

四

大阪の町人學者として有名なる山片蟠桃の「夢の代」(文政三年西曆一八一〇年)にも富豪抑壓の然るべきことを論せる條がある。曰く『救助は百姓を先として諸士を次とし、工商を其次とし、出家遊民乞食を又その次とすべし。豪富のものにはよ

くく噓し、財を出して救はしめ、或は米穀を他國より糴させて其洩たるを救はしむべし。隨ざるものあらば其家を沒收して財をちらし民を救ふべし。これ人を殺して萬人を活す法にして變中の權道なり。夫れ常に同じく庶人にありながら、財多きがゆるに貧民に腰を屈めさせ趨陪せしむ。かゝる變世には平生の蓄積を出すべきのみ、かくの如くしてよく國中をすくひたらば、公よりも擢んで褒美あるべし。然らざるにおいては沒收して貧民にちらすべし。これ虐政と云にあらす^{*}と

五

以上の三論はその内容に於て必ずしも同様にあらずと雖、富豪をしてその財を散せしむべきことを説ける點に於ては何れも同様である。かくの如く富者をして其財を出さしむるの根據については、武士は祖先が戰場に馳驅して功勞を立て、子孫も參觀交代臨時の御手傳等にて國事に奔走し、農民は旦暮耕作に盡して國民の食料品を生産するにかゝわらず、町人は自ら勞する

ことなく、居ながらにして莫大なる差益を占め、次第に富を重ねて居る。而も彼等が安穩に生活せるは是れ全く國恩による所である。則ちこの國恩に報謝するためその蓄積せる富の一部を差出さしむべしといふに在る。この趣旨は天保十四年七月の用金令にも明かに顯はれてゐる。^{*}

然しながら富者をして財を散せしむるの方法に至つては、以上の諸論必ずしも同様ではなく、本居宣長は強制的に徵收することを不可とし、富者をして納得せしめて財を出さしむべきことを説いてゐるが、他の二者に至つては然らず、植崎九八郎は御用金の方法により、山片蟠桃は富者が出捐を肯んせざる場合にはその財産を沒收するも可なりとし、何れも強制徵收の方法を是認して居る。

更に徵收せる財の用途については、本居宣長は専ら貧民救済に用ひんとし、山片蟠桃も窮迫せる階級特に農民階級の救済に充てんとするものゝ如くであるが、植崎九八郎はこれによつて

幕府財政の困窮を救ひ、以て間接に農民階級の負擔を緩和せんことを期せるが如くである。

六

以上の所論に反して白河樂翁公の「庶有編」には『有餘と不足とを齊しくせんとして富家の財を減せんとするも、亦金銀の用塞りて弊となす』と説いてゐるが、茲に奇抜なる議論は平塚茂喬の説である。その著「末黒のすゝき」(天保十年の著か)^(一八四三)に曰く『天下の經濟を試に論ずる時は、今日農工商の業をも勤めず安座飽食して王侯の富をする者は浪華の豪家町人共也。日本國大小名の權は悉く此輩に奪はれて薩藩・備藩・平

の如き大國の主も鴻池が島屋の鼻息を仰がるゝは口惜き次第也。されば迎右町人共の貨殖したるは夫々初代の智力に依る事にて諸侯の先祖武功鎗先を以て國郡を領せらるゝと同じ道理なれば無謂其産を減ずることも叶べからず』とて武士の戦功と町人の商略とを同一視して、富者の財を徴するの理由なきことを説いてゐるが、『但し大名は參勤交代其外公役あれ共豪家は其事な

く、畢竟は遊民の大なる者を其儘差置るゝも如何なれば、何卒課役を被仰付、是迄の榮耀歡樂全く太平の御餘澤なる國恩に報くはすべき事當前也。其御用公役は蝦夷地并諸國金銀銅山等の發開をも被申渡、主人は云ふに不及、番頭別家手代迄不殘遠境避地へ一ケ年代りの詰越を致させ、無滞御用を勤たる者は苗字帶刀御免、功に應じて御褒美をも賜るべし。左すれば平日淫酒に耽りたる罰をも暗に行はれ、仕付ぬ艱難を仕馴て身の養生長壽の種にも成るべき歟、竊に聞く近年佐渡の金山を掘盡して南部領の金山爲見分御普請役金座人等被差遣趣なれ共、兎角公儀役人出役する時は、俗に云ふ雜用倒れに成て事就り難きよし』とて武家の參勤交代と同じく富者に課役を課すべきことを説いてゐる。かくの如きは財産を徴收せらるゝよりも尙一層の苦痛であり、富豪抑壓の手段は富者に對する刑罰に變じたる如き感がある。

七

右の平塚茂喬の説は例外とするも、富者の財

を散じて國用に充て若くは窮民救済に充つるの思想は、相當に認められたものゝ如くである。御用金は前者の場合であり、飢饉火事地震其他の天災の場合に富者を懲罰して窮民の救済に當らしめたことは常に見る所である。然し御用金の可否は明治の初年にも議論せられた所である。明治二年三月の公議所の討論では、これが廢止を可とするものあり、否らざるものもあつたが、遂に四月に至つて御用金を廢し國債法を設くるの上裁書を上るに至つた。^(註)このことはやがて徳川明治兩期における國民思想并に社會財政經濟組織の相違をも示すものであらう。

天台宗團の財政

中川興之助

一 緒言

比叡山延暦寺を大本山となす天台宗の我國宗教界に於ける現時の勢力は、さまで大なるもの^(註)に非ずして、山法師の跋扈せる昔時の豪勢に比

すべくもないが、傳教大師立宗以來、法統を繼ぐこと茲に一千百有餘年、今猶、三、四六三の寺院、二、〇八三の住職、八六八、九六八の檀徒九九六、九九四の信徒よりなる宗團を組織してゐる。私は今この宗團の財政一般を述べやう。

(註) 日本佛教界に於ける天台宗の勢力

日本佛教各派	寺院數	住職數	檀徒數	信徒數
天台宗	三、四三三	二、〇八三	八六八、九六八	九六六、九九四
有百分比	五%弱	四%弱	三%弱	七%弱
又天台宗各派の總勢力を眞言宗各派の總勢力に比較すれば、天台宗は遙に劣勢にて寺院數は三七%、住職數は四〇%、檀徒數は二二%、信徒數は一〇%である。				

二 一派の統制組織^(註)

天台宗は全國(北海道を除く、北海道に關して特別の規定を設く)を三十教區に分ちて、一般末寺僧侶信徒を統轄する。但し直轄寺及び延暦寺一山を教區外に置きて、一般宗則を適用せずして特段の取扱をなす。各教區は自治を原則となし、區内の財政及び「條例」を議決する機關として「教區會」あり、教區長は之が執行機關と

原傳藏、明治初年における富豪税に關する評論、歴史地理第三十四卷二號
 此の數字は宇宙第一卷第四號に掲げられし小松雄道氏の「諸宗數の現勢」に據る